令和五年七月

漢詩鑑賞

**望廬山瀑布**

**のをむ**

**日照香爐生紫烟　　はをらしてをず**

**遙看瀑布挂長川　　かにるのをくるを**

**飛流直下三千尺**

**疑是銀河落九天　　うらくはれのよりつるかと**

【通釈】起句　太陽がさんさんと香炉峰を照らし、山々は紫にかすむ山の

　　　　　　　気に美しく包まれており、

　　　　承句　遙か彼方に、滝が長大な川をたてかけたように流れ落ちて

　　　　　　　いるのが見える。

　　　　転句　(ちかづけば)その流れの勢いはものすごく、まっすぐに三千

　　　　　　　尺もの高さを飛び下って、

　　　　結句　まるでの川が、天空から流れ落ちているのではないかと

　　　　　　　まがうばかりである。

【語釈】

　　廬山…江西省九江の南にある名山。多くの峰から成る景勝の地。李白

　　　　　は一時ここに棲んだことがある。その昔周の時、匡俗が此の山

　　　　　に隠れ定王の招きに応じないので使者をやって之を訪うたとこ

　　　　　ろ、既に登仙して無人のがあったので廬山と名づけたという。

　　　　　又匡廬ともいう。

　　瀑布…大きな滝。

　　香爐…ここでは香炉峰をいう。廬山中の峰の一つ。山の形が香炉に似

　　　　　ているところからこの名がある。

　　紫烟…山の気が日光に映じて紫色にかすんでいること。

　　挂長川…落下する滝が川をたてかけたように見える意。挂はかける。

　　直下…まっすぐに落ちる。

　　三千尺…ここでは非常に長い例え。実数ではない。

　　疑是…　……かと見まがう。

　　銀河…の川。

　　九天…おおぞら。天の最も高いところ。

【押韻】　平声、先韻。烟、川、天。

【解説】

李白(七〇一―七六二)は盛唐の人。杜甫と並んで中国を代表する大詩人。酒を好み詩仙と称せられる。詩風は豪放。五十六歳の時、安史の乱を避けて廬山に隠棲した時期があり、この詩はその頃の作とする説が有力である。

詩の前半は香炉峰という美しい山名に紫烟を配し、その中に長大な瀑布のかかる望景を述べ、転句、結句では滝自体をいかにも李白らしく豪快に詠じた構成も美事で、じっくりと味わいたい傑作です。

以上